



樂亭著  
貞房画

全三冊

# 倭二十四孝

乙巳孟春 大榮堂版

信州の孝兒

信民何某と

男子と

信て喜ふ

かきとある

後妻とむる

い妻が小がらむ男

ありて折く文を通る

何某同いふと云ふ文と

さしとそそ身物成湯かまれば

戸隠のへもあつたのげせ



「孝あるは

本多ある

くわい丸太橋

かきとある

「孝あるは

本多ある

そのあり

中らうねと

みか

はきと



佐紀民直

大和の佐紀民直といふ

所の民の直民の娘

なり固く教の

大和志す

果安といふ

人の妻と

ぬく不幸に

あてまよ

道と

守り



男姑

孝成法にまて

継ふと口が

せうふと合せて

八人けりけりてあて

かくけりてあて

養育の乃孝れ

乃孝れ

むとてあて

賢女とみえ

感ふけりてあて

七四



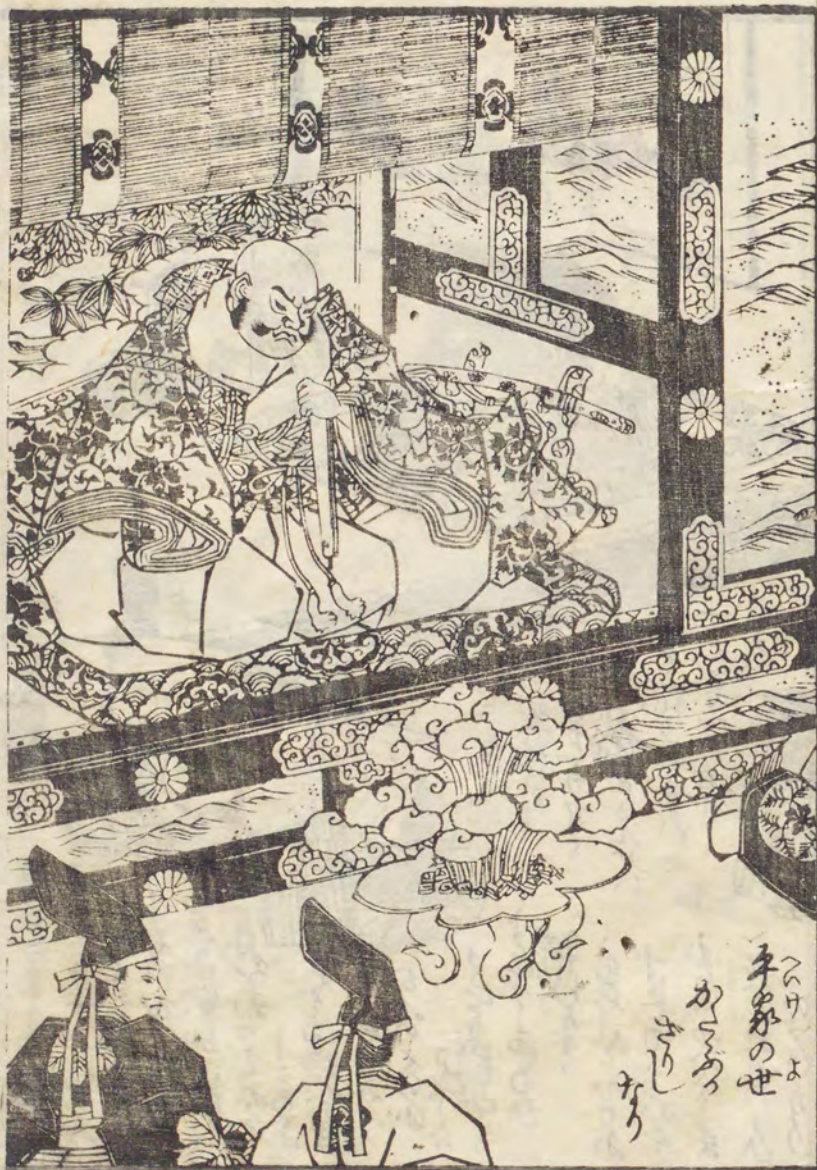
小松内大臣

内大臣重盛の平相公  
 清盛の病子なりまゝ家に  
 父の清盛をとりて成すは  
 君成あけがりの民と  
 苦めよろけは後をたそ  
 らすまゝして重盛の  
 船きく神明あつた小まの  
 聖人のたてまつるさあぐ  
 いふあ命れとるゆふまをも



父を  
 召さす  
 引入さんと  
 いさめ  
 新、あひぬ  
 されバ  
 重盛  
 存生の  
 うちハ  
 大運で  
 あさ  
 ためて

平家の世  
 かこあ  
 かり





孝子今女

大和の玉竹の内村の  
 何れか娘今女今女といふ人  
 のと百姓もともども勤まらるる  
 周知の事なりしが母は終つて  
 一人の親ははたとていふあゝ  
 父も年おひぬまのかせだの  
 あつたを親ま  
 久しおとこまうの  
 おりけむだるど  
 老ねをすまゝ父のねむ  
 ののいふあつたのあつた  
 ぬてゝあつたを父のねむ



あつたを父のねむ  
 大和の玉竹の内村の  
 何れか娘今女今女といふ人  
 のと百姓もともども勤まらるる  
 周知の事なりしが母は終つて  
 一人の親ははたとていふあゝ  
 父も年おひぬまのかせだの  
 あつたを親ま  
 久しおとこまうの  
 おりけむだるど  
 老ねをすまゝ父のねむ  
 ののいふあつたのあつた  
 ぬてゝあつたを父のねむ



孝子今女  
 天より入  
 うみの  
 ちり



薩摩福依賣

薩摩の玉れやき  
 氏の狼かり父母老て元  
 より家多き常い病あり  
 福あかちあとう人ふ  
 雇いとりけ物を得て  
 父母とやうひあけりあ  
 あえてとちの年たあや  
 父母とやうにひあけりあ  
 二十多にやうに仁者の帝の  
 あんとき奏聞あけりあ



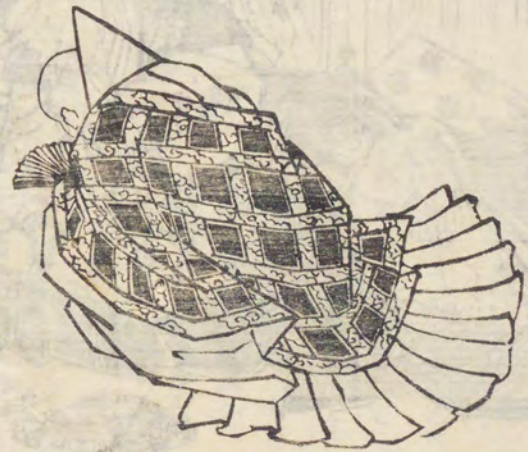
佐之級と賜り  
 門小あきとて  
 家常  
 たり





後三條院 ごさんじょういん

は帝のまゝなるを電かきし  
 申けるを業に小斗板  
 をかきせりひたり成る信都と  
 りん法源折く要折積ふ  
 まのりける成る何のさえれ  
 以折中少斗と評させ  
 うへるわと名祿  
 まうけまへ  
 帝関 みかみ  
 めされ



▲我父の在世と十代 わがちちのいんせとじゅうだい

万世といふ所はやむすれ  
 我那後のとといふ所の  
 出来はふつかりある  
 主心のぬねやうふと  
 小斗いふむあはれ



後 ご  
 要 よう  
 我那 わが  
 天下 てんか  
 治 ち  
 あり

撰者

樂亭西馬



畫工

橘庵貞房



天保十五甲辰冬十月發市



東都書肆

日本橋通二町目

三河屋甚助

南傳馬町三丁目

三河屋善兵衛

